JISS 国立スポーツ科学センター
Quarterly News Letter 季刊ニュースレター Vol.6
JISS
Summer 2005

アテネ五輪を終えて 新たなる挑戦

センター長　笠原 一也

2代目センター長に就任して早いもので3ヶ月を過ぎました。その間、国立スポーツ科学センター（JISS）では業績評価委員会や運営委員会が開催され、関係者各位の協力のもとに無事に平成17年度もスタートができたのではないかと思っています。

これから具体的にそれぞれのプロジェクト等の事業を展開するわけですが、アテネ五輪での日本選手団活躍の要因にJISSの存在も大きかったと評価されているように、JISSは言うまでもなく我が国のスポーツ科学・医学・情報の研究拠点として、またミニトレーニングセンターとして、国際競技力向上を支援していく施設であり、日本のスポーツを強くすることが使命であるといえます。

それ故、来年のトリノ冬季五輪、3年後の2008年北京五輪に向けての取り組みが今後より重要であるといえます。

更には、JISS周辺に大規模なナショナルトレーニングセンターが2007年末には完成が予定されており、ますますJISSの存在とその果たす役割が大きくなることが予想されます。

今後は、「チームJISS」として部内の結束はもちろん、JOCやNFとの連携協力のもと、2008年の北京五輪に向けてアテネを超える成果があげられるように、また2012年の五輪はロンドンに決まったことでもあり、新たな挑戦が始まったのであります。

水球女子日本代表と笠原センター長

JISSプロジェクト報告 progetto プロゲット No.3

日本ハンドボール協会へのサポート活動

（財）日本ハンドボール協会・蒲生強化本部長に聞く

「JISSを有効活用して組織の充実を図る」

JISS×HANDBALL

日本代表チーム

映像分析によるサポート

日本ハンドボール協会
強化本部長
蒲生晴明氏

JISSのスタッフは人数が限られていますし、すべての競技について精通したスタッフがいるとは限りません。ナショナルチームに対するサポートを丸投げ的に求めている団体もあるようですが、それでは真の発展は望めないでしょう。やはりNFレベルでJISSに対して何をサポートしてもらいたいのかを分析し、明確にしたのちに支援をお願いすることが組織の充実につながると思います。

ハンドボール協会では「協会がヒト・モノ・カネで自立する」ことを構造改革の目標のひとつとしていますが、そのなかには当然、サポートスタッフの自立も含まれます。さらに自立する努力をし、その中で不足する部分をJISSに支援してもらうというスタンスでなければ本当の意味での競技力向上はあり得ないと考えています。

おかげさまで2年間のJISSの支援を受け、情報・科学委員会を立ち上げることができ、ここが中心となってナショナルチームやNTSへの支援をする体制が整いました。

■現在の支援は？

初年度はゲーム分析に関する支援で、オリンピック予選における分析活動とここで得た成果をテクニカルレポートとしてまとめ、強化・育成にフィードバックしました。2年目はこれに加え、パフォーマンスを評価する部分にトライアル的に取り組みました。そして今年度はハンドボール選手の体力的要素に関する共同研究を開始しています。

ドッヂボールとコラボレーション 目標は全国3000チームの少年団

■ここ数年、協会でめざす一貫指導のシステムも定着してきているようですね。

我々がとらえる一貫教育というのは一人の指導者が継続的に指導をするというのではなく、いつでもどこでも同じ内容の指導を受けられるという考えかたです。それには指導者が一体となり、具体的な指導方針のもとで運営していかなければならないと考えています。ハンドボール協会ではエリートスタッフ養成部会を設置し、次世代のハンドボール界を担う人材を育てるようにしています。NTS運営委員会、強化委員会、審判委員会、指導委員会のなかから若手指導者を選び、海外遠征などにも帯同してもらい、経験を積めるようにしています。団塊の世代がリタイアすると組織がバラバラになってしまうようでは健全な団体とは言えません。早期の人材育成は避けて通れない課題でした。

■これからはユース世代の強化も求められますね。JISSの立場から見ると、さらにテクニカルを充実させるには専任のスタッフの充実が必要と感じますが？

テクニカルの充実は急務ですね。専任スタッフを分析部門に置くことで分析がマーケティングに発展していきます。そのようなスキルアップも重要と考えています。

今年度の競技力向上に関する事業の基本方針は「セッションを越えた協力体制で北京オリンピック出場」としています。北京オリンピック出場のための強化施策立案と同時に、日本ハンドボール協会の強化に関して「構造改革」を実施します。よってNTSをシステムとした「発掘・育成・強化・指導」について将来にわたりオリンピック・世界選手権に出場できる体制を構築していこうと取り組んでいます。

■普及ということではドッヂボールとコラボレーションもしていると聞きましたが？

2010年にハンドボール人口をボールゲームの中で日本で3位にすることを目標にしています。それには小学生を中心とした地域ハンドボールチームの育成が不可欠となりますが、全国に3000のハンドボールチームをつくりたいと考えています。

小学校ではドッヂボールが授業で取り入れられていますが、中学、高校には部活動としてハンドボール部がありません。そのことからドッヂボールが好きな子どもに似た要素を持つハンドボールに親しんでもらおうと考えました。

6月に世界ユース選手権アジア予選U―19壮行試合を行いましたが、その大会の一環としてドッヂボール大会も壮行試合の前に行いました。この中から少しでもハンドボールに興味を持ってくれればと考えています。

JISS支援でノウハウを蓄積 情報・科学委員会を設置する

■JISSが4年前にできました。その立ち上げに際し、日本ハンドボール協会ではどのような期待を持たれていたのでしょうか？

もっとも期待したのは現場の声が瞬時に反映される組織であってほしいということでした。JISSは我が国のスポーツの国際競技力の向上を目的としたスポーツ科学・医学・情報の中枢機関です。ハンドボール協会ではJISS設立前もいくつかのサポートを受けたことがありましたが、なかなか満足のいくものではありませんでした。代表選手のメディカルチェックをお願いした際も細かいデータはいただけるのですが、それを受けて何をすべきかが見えてこない。その点、JISSでは調査結果を受けてから、きめ細かいフィードバックがあり、何をすべきかが明確になりました。現場の目線に合わせた支援といえるでしょう。

■最初の支援は何でしたか？

最初の支援はゲーム分析でした。支援内容はJISSがゲーム分析を直接行なうのではなく、ハンドボール協会内に組織された分析班へのノウハウの提供でした。もともとハンドボール協会には強化部のなかに医・科学委員会があり、彼らのさらなるスキルアップが課題でした。

このニーズを満たしてくれたのがJISSでした。単にナショナルチームに対する支援だけではなく、ここから出てくる分析結果を次世代のナショナルチームにつなげるための示唆を生み出し、ナショナルトレーニングシステム（NTS）に還元するシステムが確立されました。その結果、2003年、2004年の活動を通して協会内では分析班の活動が広く認知され、2005年度からは情報・科学委員会としてその存在が位置づけられることになりました。

■NFとJISSのもっとも望ましい関係とは何でしょうか？

トレーニング体育館

トレーニング体育館スタッフ

スタッフによる指導風景

［クローズアップ］

JISSトレーニング指導員

競技特性に合わせたプログラムで トップアスリートの体づくりをサポート

エレベーターで4階に上がり正面の扉を開くと、そこがトレーニング体育館です。面積は724.5m²、プラットフォームは6箇所、トレーニングマシンは約60種類、専任のスタッフが3名、指導補助スタッフ16名を擁する（平成17年7月現在）、トップアスリートのための施設です。

ここでは、トップアスリートの国際競技力向上のために総合的な体力向上を図ることを主な目的として、トレーニング専門のスタッフが競技特性を考慮したトレーニングプログラムの作成やトレーニング指導を行っています。プログラムの作成では、基本的なパワーアップはもちろんのこと、効率的なウォーミングアップの方法、ケガの予防や早期復帰を目指したトレーニング、ボディバランスに優れた粘り強いプレーができる体づくりなど、アスリートやコーチからの要望にできるだけ応えることに重点を置いています。2004年度は延べ11209名が体育館を利用し、個別にサポートを行った選手の多くがアテネオリンピックの表彰台に立ってくれました。

また、トレーニングのサポートはトレーニング体育館の外でも行っています。競技団体の強化合宿先でのトレーニングサポートをはじめ、トレーニングに関するワークショップを実施しています。

これらのサポートを充実させるため、JISSの他の部門とも積極的に情報交換を行っています。体づくりでは栄養を欠かすことはできませんが、トレーニングの効果を最大限に引き出すために、栄養指導室のスタッフと定期的にミーティングを行っています。また、リハビリテーション室との連携をとりながら、積極的なサポートも行っています。今後は情報研究部との連携のもと、映像によるトレーニング情報公開の検討を進めていく計画もあり、トレーニングサポートの更なる充実を図っています。

サポートした選手が国際大会などの舞台で最高のパフォーマンスを発揮している姿を見るのは、私たちの最高の喜びです。これからも質の高いトレーニングのサポートができるようにスタッフ一丸となって取り組んでいきたいと考えています。

平成17年度
「体育の日」中央記念行事／子どもの体力向上キャンペーン

元気アップ子どもスポーツフェスティバル

2005年10月10日　会場:国立スポーツ科学センター

主催：文部科学省・(財)日本体育協会・(独)日本スポーツ振興センター・(財)日本レクリエーション協会

詳しくは日本体育協会ホームページをご覧ください。　http://www.japan-sports.or.jp/event/1010.html

Quarterly News Letter JISS Summer 2005

JISS 国立スポーツ科学センター

季刊ニュースレターJISS Summer 2005　平成17年7月31日発行（年4回発行）
発行　独立行政法人日本スポーツ振興センター 国立スポーツ科学センター
編集・発行者　笠原 一也
〒115-0056 東京都北区西が丘3-15-1　http://www.jiss.naash.go.jp/